

広島俳句倶楽部

令和七年四月作品集

「春の訪れ」 亜矢

私は先日、チエンバロを学ぶ学生の発表会へ行ってきました。九名が多少緊張した面持ちで、バロック期の曲を演奏しました。聴きに来ていた人は少なかつたですが、若々しい演奏に、終わった後爽やかな気持ちになりました。普段、学生の世代の人と関わる機会がないので、私にとってよい刺激になりました。

大学へ春川に沿ひ歩きたる

先生が受付に立つ春日かな

誰も居ぬホールへ入る春の服

早春や文字びつしりのプログラム

チエンバロの屋根は全開春めける

如月や黒のドレスの裾揺れて

楽譜持ち礼の学生フリージア

先生の花束抱へあたたかや

春時雨コンサート果て橋渡る

鴉鳩雀も飛んで春の川

《作品鑑賞》

松田裕子

どの句も春の訪れに心が浮き立っている様子がうかがえます。寒かった冬が終わり、誰しも、意欲が湧き、活動的になるものです。音楽に精通している亜矢さんにとってコンサートを待ち望んでいた様子が、どの句からも感じられました。

大学へ春川に沿ひ歩きたる

待ちに待ったコンサートが開催されたのでしよう。長かった冬が終わり音楽の大好きな作者の弾む気持ち、春川に沿ふという言葉に集約されています。気持ちのいい句ですね。

誰も居ぬホールへ入る春の服

早々とホールに入る作者の高揚した気持ちがよくわかります。パステルカラーである春服も高揚感をよく表しています。

誰も居ぬの表現が上手いですね。

チエンバロの屋根は全開春めける

チエンバロの楽器がどんなものか知りませんが、きつと美しい音色なのでしょうね。全開という言葉が作者の心を上手く表していると思います。

春時雨コンサート果て橋渡る

コンサートの余韻を染しみながらゆっくりと歩いているのでしょうか。ほてった頬に、少し冷たい雨は心地よく感じます。

春時雨の取り合わせが上手いですね。

佐保光俊

待ち人の遅れて来たる桜かな
川にふれ戻り来る人花万朶

高尾ひとみ

我が家へと枝垂桜の道もどる
帰りきていつもの窓の桜かな

あざみ

杖ついて桜の中を歩きけり
持ち寄りの弁当食べて花見かな

亜矢

水切りをする男たち花の昼
風の音聞きつつ上る花の山

綾乃

架け橋をひいふうみよと行けば花
あくせくと働けばこそ花見かな

井藤希

城山のまた一本の桜かな
老桜鳥居の脇へ伸びてをり

大畑恵

散策の人それぞれの桜かな
淡墨の桜満開母偲ぶ

暁子

しきりなる落花の下の立ち話
出不精の姉を誘ひて花巡り

すみれ

我が家から見ゆる桜の満開に
夕暮れて散歩がてらに桜土手

知佳子

花人の笑顔を見つつ歩きたり
手を入れてせき止めてみる花筏

ちどり

車窓から川沿ひの花見てをりぬ
ジェット機の音響きけり花の昼

辻純紅

くぐりたる枝垂桜の蕾かな
行き過ぐる人みな笑顔桜かな

雲雀

土手桜歩いて歩いてまだ続く
新調の帽子に花の散りかかる

ふじ女

花巡り航跡を追う鳥と鯉
サッカーと野球行き交う花の宴

松田裕子

鳥賊焼の匂の方へ花見客
人づてに淡海の桜散りたると

村上正人

花散らす風に肩寄せ老夫婦

散る花を見つむすびを食うてをり

森口良樹

いつになく早足花へ向かふ道

見上げては立ち止まりては花の道

秋楡

桜咲く道に早散る花びらよ

今井淳子

ふるさとの名を持つ川や花筏

大原良子

桜まじテラスの椅子に文庫本

河原静子

公園の椅子に腰かけ桜見る

紀英子

春雪と一緒に花の散りにけり

熊谷ゆり子

初花に早くも鳥の来てをりぬ

桑門わかこ

花の道折り返し来て別れけり

桜陽

学校のすべり台へと飛花落花

高嶋絹代

地に着きてより輝けり花の塵

高梨英子

ぐづる子に花一輪を近づくる

民

吟行のそぞろ歩きの花の道

土肥律子

目を閉ぢてもう一度見る桜かな

金一

撮りますよ花を背に立つ老夫婦

撫子

本堂を過ぐれば花の山となる

古川廣子

風に乗り舞ふ花吹雪後を追ふ

みさ子

聞きづての一本桜見にゆけり

美耶

花曇瀬戸の島へと船の出る

やす保

土手沿ひの光まぶしき花見かな

山崎桂子

花便りブルー・プライン賑やかに

山野ウタ

満開の桜と母の写真撮る

田の雪を踏んでより釣る若魚かな
日が差せば余寒の伯耆あたたまる
おほかたは田を起こしたる吉備国
初花を安芸に見るこの道に見る
上ミ下モの橋の霞める古道かな
つばくらに周防の川の照り翳り
木の橋を渡り返して山笑ふ
うぐひすの二度三度鳴く古墳かな
周濠と思しきところ椿落つ
前方を後円を見よ春の波

佐保光俊

雪の田に何見つけてや鴉下り
急行の車窓に見ゆる昨夜の雪
こんくれえ雪た言はんと運転士
バス待てば瓦の雪のしづりたる
春浅き川を小鳥の飛びゆけり
背戸山に積りて朝の春の雪
田に畑に見渡す限り春の雪
いづくより来てやかほどの春の雪
ゆるぎなき吾でありたし牡丹の芽
一分ほど咲いたる梅に鳥の来る

高尾ひとみ

屋根を越し白木蓮のかがやけり
うぐひすの鳴く坂道に杖をつく
ぐつすりと眠りし朝や桃開く
同郷の友訪ねくる春うらら
山深き宮に来てをり百千鳥
花の校庭野球する子の声高し
下校の子声はがらかや桜土手
春夕焼中を飛び交ふ鳥の群
風薫る砂利道そろり歩きけり
朝早く煙火の上る山開

あざみ

三月やバスよりどっと人の降り

鈴植の白梅全て開きけり

杭を打つ前を横切る余寒かな

美術館の石垣見上げ日永し

金属のオブジェ回りぬ春の空

よく動く鳩の首元風光る

橋歩く人を見てゐる春日かな

焼きたてのマカロン匂ふ春の昼

人の居る河原を燕横切れり

新しき消しゴム匂ふ春休

亜矢

初花のそつと手にある見舞ひかな

年長に歩み合はせて花の道

鶯鳴いて桜並木のなほ光へ

リュックにはむさしのむすび花の山

雀らのついばんでゐる桜かな

見下ろせば大曲りして春の川

ぬばたまの池に映るや夕桜

花鳥賊は周防の人のもてなしぞ

四年目の訪問バッグ花の散る

瀬戸内の春暮のなかの夫婦かな

綾乃

手に入れし根付きの芹を洗ひをり

春時雨ビニール傘のすれ違ふ

駐車して降るれば香る沈丁花

蒼天と鳥声だけの春野かな

犬の嗅ぐ春野の土を我も嗅ぎ

春泥を厭はぬ犬の尾の白し

のどけしや犬と座れるカフェテリア

さまざまな人それぞれに花を見て

逍遙の園に思はぬ緋木瓜かな

夏鴨の水脈に乱るる枝の影

井藤希

白木蓮郷の山路に咲く頃か

土佐水木郷の山路を想ひけり

土佐水木花なき山の賑はひかな

坂道を上つた先の山桜

山の道辿りて着きし山桜

山桜けき満開となりけり

陽炎や向うに見ゆる郷の山

昼下がり夫と眺むる紅椿

庭の光紫色の一夜草

夕さりて鶺鴒の居る家路かな

あかあかと谷川流れ落ち椿

笹の影映る水面を柳鮫

春落葉途切れてはまた古道行く

陽炎の中より人の近づきぬ

波止の人春の潮を眺めをり

下ろしたての靴の馴染まず鳥墨

雪柳咲く路地抜けて夕の海

組橋を潜り一閃つばくらめ

空高く山は笑うて五橋かな

大銀杏枝ことごとく若葉して

夫の声部屋中響く日永かな

杖の我抜いて学生初音して

車椅子降りて石投げ春の川

ロープウエーに乗つて春山登りたき

木の芽風この園夫の母校の果て

かつてここ吾子晩春に迷ひ子に

株分けし我が家に郷の雪柳

連翹の花を潜りて鋏を取る

昨夜の雨我が家の前に花の屑

タムシバは咲いてゐる木とまだの木と

大畑恵

暁子

すみれ

峽の家に風抜けてをり花辛夷

道消ゆる光まで菜花続きたり

花木瓜の手入れしてをり人訪へば

真下より見上げてをりぬ花楓

人込みの途切れしところ花馬酔木

傘ささず話してをりぬ木の芽雨

蒲公英の絮吹いてみる追うてみる

代はる代はる場所を譲りて花を撮る

ふるさとの山はなだらか里桜

ひとたびは空に上りて散る桜

知佳子

鉄橋を渡る正面雪の富士

残雪を遠く見ながら汽車走る

山里へ峠下れば梅白し

買ひ物に行くたび門の梅を見る

美濃和紙を紙屋で買つて雛納め

枝垂桜行きよりもつと咲いてをり

若芝にしやがみてそつと手を置きぬ

川土手に大根の花見下ろせり

今年また川土手に揺れ雪柳

噴水を浴びてすぐ出る男の子

ちどり

春雪や庭の堆肥の匂ふ家

木蓮の蕾はどくる朝の風

土筆出てるるよと指で教へられ

伸びきつた土筆に空の青さかな

風光る二尻バイクの走り去り

竹秋やおにぎり二つの御弁当

春分の鳥の集まる林かな

ビル風や歩道に咲いて花なづな

麦青し畔の続きの道を行く

草笛に丁度よき景を見つけたり

辻純江

橋の上土筆を見つけしやがみたる

夫と居て蝶の行き先追うてをり

雲雀鳴く空の青さに見入りたり

春の雲ふはつと乗つて旅したき

春の塵厭うて籠る一日かな

此処此処と指差す先の熊谷草

行きに落ち歸りに落つる椿かな

音の無く散りし椿を拾うたる

今盛り父の好みし花海棠

春眠の目覚めてよりの忙しき

雲雀

酒蔵の梁を好んでつばくらめ

木々高く囀ばかりいるところ

こてまりや隣は派手なおおてまり

青空に海と島と躑躅咲く

混雑が過ぎて無人の藤の棚

神降りて産まれた国や磯遊び

山奥に春霖を呼ぶ神話の地

森林の谷間を渡る春雨傘

アマテラス雲が開いて五月来ぬ

春夕焼映る海越え目指す町

ふじ女

喧騒の街抜け囀の川へ

信号は赤囀の近くなる

囀や母の墓前に姉と居て

げんげ田に遊びし三人姉妹かな

家並を抜けて桜の土手に出づ

架け橋の真中より見る春の川

担任の袴に桜ひとひらよ

山椒の芽ちらし寿司でも作らうか

人の香の残るベンチや朧月

春の昼スーツケースに旅支度

松田裕子

水仙を手折らば季節進みたる

臥す母の脇に水仙挿しにけり

人触るるたびに揺れたる雪柳

庭に生る菫を摘みて口にする

庭の花咲けば紋白蝶来たり

桜まじ車を降りて歩きたる

花筏遊覧船の波に揺れ

川下に向けて針魚の遊ぎたる

テニスする向うに桜並木かな

山腹の煙つてゐたる山桜

ゆるやかに車椅子押す梅日和

庭先に交はす会釈や枝垂梅

バスを待つ胸のコサージュ卒業子

存慶の路線に乗つて花の客

吟行の五橋渡れば花の客

串を焼く匂ひ漂ふ花の風

花筵上戸も下戸も笑顔して

列長き女性のトイレ花の客

花万朶吟行終へて懇親会

笑顔して弾む話や桜餅

ちらほらと露の臺あり魚龍は空

金網をひらりと抜くる初蝶よ

沙美の濱春風に波光りけり

タムシバへそよ吹く風に吹かれ行く

山の駅乗り降りもなく桜咲く

黄水仙一輪折つて玄関へ

林道に次から次へ山吹や

残雪を彼方に望み尾根を行く

春落葉堀よりこぼれ道に散る

村上正人

森口良樹

秋楡

ひこばえの光なる雲の自在かな

白足袋の訪うて色増す花の道

買ひ物の籠に落花やペダル踏む

遠足の帽子駆け寄る牛の鼻

揺り上ぐるリュックにふるる蹴躑かな

山吹を帽に別るる坪の村

春潮にペダル止めたる斜張橋

山開スケッチブックのばたばたと

源流に仰いでゐたる夏の星

今井淳子

しばらくはそこに佇み木瓜の花

橋桁を見上げてゐたる春日和

すぐその公園までの花見かな

対岸の桜またよし友と居て

三人で並んで食ぶる花見かな

花の宿一句どうぞと勧められ

擦れ違ふ異国の言葉花見かな

十人の俳句談議や春の夕

窓越しに見る遠山の桜かな

土肥律子

福寿草茶室の外は昼の月

禅寺の門前に梅手を合はす

山陰にはつと一息土匂ふ

子とともに摘みし土筆をお裾分け

卒業の親子が渡る錦川

しやぼん玉つぎつぎ飛ばし行方見る

桜咲く子を抱きし日を思ひ出す

集まりてSUP漕ぐ人桜咲き

朧月病室の子に電話する

今

電線に知らぬ鳥来て春田打つ

根分けして指先香る菊の香よ

学校の塀の外にも桜草

駅に沿ふ堰に見つけて水すまし

思ひ出す母の繰り言桜まじ

水切りを競ふ男の子や桜土手

匂帳へと挟んで花を持ち帰る

つばくろへ開けつ放しの駅の窓

登り来て水田鏡の春の月

山野ウタ

満開の花川面へと傾ぎけり

桜咲く固く閉ざして長屋門

中州まで菜の花咲いて錦川

足元に枝に数多の藪椿

草餅を焼く祖母の手の節高し

大原良子

お花見の弁当に散る桜かな

満開の花びらひらり手の中へ

ほろ酔ひの足元照らす朧月

校門へ続く躑躅の咲き始む

霞棚引く瀬戸の海朝日差す

美耶

手のひらに水仙の香の残りけり

朝早く桜一枝取りにけり

手をつなぐ山道肩に桜散る

裏庭に真つ赤な椿咲きにけり

河原静子

畑打ち蛙跳び出す手元かな

馬鈴薯の芽かきを終ふる夕べかな

春嵐法座の用意滞り

紀英子

月出でてゆつくり暮るる桜かな

襟を立て日暮の桜見て歩く

剥がれゆく鱗のごとく落花かな

熊谷ゆり子

鈴植の上よく乾く牡丹かな

身籠れる人ぼうたんを嗅ぎにけり

牡丹の夜風に遠く散らばりぬ

桑門わかこ

坂上り法衣の靡く彼岸西風

桜並木川面に揺るる八分咲き

早朝の蛙の鳴いて通学路

桜陽

清明の川面小さく波打ちぬ

清明の螺鈿の巻きのくつきりと

春の夜やテレビの声に返事して

高梨英子

春雷や雨戸を立つる暇もなく

川土手の桜の並木どこまでも

咲き出せる八重の桜を仰ぎけり

民

花よりも赤ん坊見て花筵

送らるる友と見てゐる花と月

袖丈は人それぞれの四月かな

山崎桂子

シャトルバスに乗って頂上残る雪

花の雨毘沙門さんに灯のともる

高嶋絹代

ものの芽の土押し上げて赤きかな

いつの間に大きくなりぬ雪柳

撫子

春の雨寺に集ひてお茶を飲み

提灯と桜川面を照らしをり

古川廣子

野遊の親子の帽子風に飛ぶ

春の鴨今朝も二羽居て散歩道

みさ子

枝広げ 蕾はころぶ壺の花

春の昼ゆるりと茶筌回しをり

やす保

令和七年三月度作品集より

大畑 恵 私の選んだ十句

枯葉踏む音のしてゐる古墳かな
 夕暮れて冬至の雨の止みにけり
 汁椀に若菜浮かせて朝餉かな
 高校へ坂道長き寒さかな
 春の雪君のフードへ降り込んで
 白梅に隠るるままの目白聞く
 金櫻梅やまだ濡れてゐる山の道
 春泥を付けたる靴で夫婦る
 今年またいつものここで土筆摘む
 節分草一両電車乗り継いで

佐保 光俊
 高尾 ひとみ
 あざみ
 亜矢
 綾乃
 井藤 希
 曉子
 知佳子
 雲雀
 森口 良樹

森口 良樹 私の選んだ十句

裸木の美しきかな神の山
 酒蔵を閉づと貼紙花八手
 ことのほか静かな空に雪の降る
 うすらひの芹採る谷に風の吹く
 待春の瀬音確かや谷伝ひ
 絶え間なく水の音して斑雪
 寒雀ドレミドレミと跳ねてをり
 春近き一番ホーム風抜くる
 宵星と共に滲んで春の月
 如月や眼鏡頼みに毛鉤巻き

佐保 光俊
 高尾 ひとみ
 井藤 希
 大畑 恵
 曉子
 知佳子
 辻 純江
 松田 裕子
 村上 正人
 秋 楡